

# 京都の建築と伝統工芸

地域建築論に賛成して

柴辻政彦

## ◎地域建築に触れながら

唐突な切り出しで失礼かもしれないが、「地域建築論」という考え方があるとすれば、わたしはその考え方に賛成したいと思う。

わたしの場合、地域建築論に賛成なのは、建築論としてではなく地域とか地方に長い間ひきつがれてきた「伝統工芸」とか「伝承技術」というものが、その考え方でいくと建築の中に生きるし、生かされると感知するからである。間違いでしょうか――。

この「京都の建築」特集でのわたしの役割は「京都の建築と伝統工芸」である。したがって、これ幸いとばかりに原稿をお引受けしたわけである。だからといって、かならずしもツボをはずさずにピッタリといえるかとなると、もちろん保障の限りではない。読者の方がニヤニヤしながらうなづいていただければもっけのさいわいである。お許し賜りたいと思う。

ここ1ヶ月ほどの間にわたしは四国の高松に

いって、香川県庁建築土木部の山本忠司次長さんに会って、前後しながら、もとの香川県知事・金子正則先生のお宅を訪問し、丹下健三先生の香川県庁舎のお話しを伺った。そして、平賀源内に出た高松のはずれにある志度の町へいき、古いお醤油屋と田舎町の風情を味わって京都にひき返し、翌週、大阪の浦辺鎮太郎先生をお訪ねして、倉敷という町がもった歴史と人物と倉敷の気骨などについて教えていただいた。そしてその足で新幹線に飛び乗って東京へ。東京は草月会館。スペイン・バルセロナの教会建築家で、ガウディ友の会々長、パセゴダ・ノネル教授とガウディ展レセプションで再会。おまけに東京では、南天子画廊で四国高松出身の画家で、アメリカ帰りの川島猛さんの「石の彫刻展」の初日。おのずから流政之氏の来場とその話題。その後、芸術新潮における流氏の再読。ローカルに固執するがゆえに国際的アーティストになった氏の波乱の半生を読む。2日後には商用で、イタリアとドイツへ。ミラノ、ボローニア、モデナ、トレヴィーゾ、ベニス。ベニスからフランクフルト、ギーセン、ボン、パリ、そして2日前に帰国。この原稿締めにとやと間にあう。考えてみると、はからずもわたしのこの1ヶ月ほどは「地域建築論」の軌道だったような気がしている。したがってやや心理的に偏重のきらいがあるが、「地域建築」と「伝統工芸・伝承技術」を無理にでも引き合わせて肩入れするという、にわか仕立になった。

## ◎都市や建築はそのまちの告示

建築というものは、その土地その土地の風光と、習慣と、美意識とでもいうべき告示を背負って、むっくり土地から生えるように建っているものであれば楽しいなあとまず思う。そして、できれば、建物の随所に、その土地の癖のある

処理、飾り、材料、紋などをみながら、土地柄に触れて尊敬したり感激する。あるいは、ひとつというものは、育った土地の歴史と不可分だなあ、というようなことも考えてみるのもいいなあと次に思う。いかがでしょうか。もちろん他人の住む町だけでなく、わたしの住む京都の町もぜひそうでありたいと思う。他人の住む町に勝手な要求をもってのぞみ、他人が訪ねてくる自分の町はどうでもいいのかにはいかな

い。そして、他所のひとが訪ねてきたりした場合に、わたくしは京都の建物の造形の特長や、屋根の勾配や、間取り構造の理由や、おさめ方の下手糞さや面白さや、代々祖の妙な癖、棟梁の頑固な遺法についておもしろく誇らしげに語る。おまけに、古い諸道具の求め先と噂、調達の昔の値段や逸話。当時の習慣と世相、そして京都だけにある他所にない特質、京都の技法の生成、さては美意識の成立、などなどに話がおよぶと想像すれば、どれほど楽しくもあり、わたくしそのものが利口者にみえるだろうと思うだけでもウキウキしてくる。

ですから、逆にわたくしは高松の志度の町にも興味があるし、イタリアのピットリオ・エマニエルが統一再建したミラノ、赤いテラカッタイルの大学古都、一ボローニア、北部田園都市の牧歌的なトレヴィーゾのひとびと、海上都市としてビザンチンを溶かしこんだベニスの知謀、なだらかな丘陵に点在したギーセンの静かな知性など、それぞれに、それぞれの土地というものの魅力を感じ、湧きでてる興味を押えようがないときがある。

建築とはそういうものである方がいい。建築はその土地と人間と物と、それに工夫と技法とにピッタリと深く結びついて、そして、そこに

生きているひとの心まで、興味深く整序しているものだと思いますのである。

また、他所から訪ねてくるひとびとには、そのひととのあいだにある生い立ちのちがひ、あるいは環境へのあたりを啓示し、それでいて敬意を払いあう。建築とか、工芸とかいうものはそういう「訓言」に満ちたものの1つであるはずであって、そうあってほしい、と思う。

地域建築を推すこれが理由である。それにおお、おそらく「都市」というものについてもまた同じようなことがいえるのではないかと思うのである。

### ◎地域都市・京都と古来の継承

さて、京都は世界第2大戦の戦火からまぬがれた。

古都がそのまま残されたということは、戦後の30余年の造築や都市改造があったとはいいながら、わたくしたち京都市民は他都市の市民にくらべ、はるかに歴史的、地域的建築環境に恵まれるということになった。そしてなお、当然ながら、建築に付随する地域的工芸環境にも同時に恵まれることになったというほかない。このことが大変重要なことで、先ほどのべた通りである。今や、われわれ京都の市民ほど、継続的に日本の地域的な歴史都市に生活体験をしている地方種族は少ないのではないかと思う。

変ないい方だが、面白い現象となっているように見受けられる。

また、こうした事実を、わたしは単にありがたがって知っているだけではない。こうした地域伝統建築が残ったために、その建築群の複修工事、増築、改築、保存に関連して何千人という職方をとおして伝統技法・伝承の習わし、ひいては工芸というものが、仕事としてちゃんと、戦後だけを数えても30余年歴史の中を生きて流

れたのである。建築に関与する伝統の訓言をひき継いだことになる。

焼野原で荒廃した東京や広島などに比べて古来の技法・遺法が維持できたわけで、まことにありがたいことである。ことに、戦後のこの30余年は急速に激変するまさに憂慮の時代だったはずである。しかし残った。

残ったお陰で、今度は伝来の訓言・由緒が秘かに育てていた「京都らしさ」という、いわば美意識の直系の後継者たちによって、遺法になった新しい仕事及要求され、もたらされることになっている。

「遺法」と「意識」の継承である。さらに、この傾向は、京都という地域から日本の伝統としてさらに地方へも波及して、まことに京都の伝承遺法にとって有益であったということができる。京風建築と工芸の伝播という現象である。

それが証拠に、仕事を粗末にしたり、仕事を受ける経営が下手だった店は別だが、ほとんどの京都の伝承遺法技術をもつひとびと、例えば、銘木店、大工棟梁、石工、左官、植木屋、庭師、瓦屋、瓦葺き、畳屋、建具屋、表具師、経師屋、鋳金具師、彫物師、指物師、家具屋、塗物師などと呼ばれる店は、以前よりももっと商いを大きく、手広くしている。衰えてはいない。程度の差や、取扱い内容に多少の変遷があったなどというのはあたりまえだから言外である。わたしは43年も京都にいて知人も多く、このことをよく知っている。

目を転じて他業種をみれば、それは切りがない。たとえていえば現代建築の分野の鉄骨・セメント・ガラスやサッシや照明、あるいは空調や電気設備関係の新しい業者の繁栄と比べれば見劣りがするかもしれない。しかし凋落もあつたりして、それも見習うことになったかもし

れない。

京都は古来の「地域建築」が残ったことで、ともかく「全方位的」に伝統に恵まれ、「よかつた」のであると明確にいうことができる。

### ◎形は遺法に従い、機能を配慮する

さて、それでは最後に、今までのと比べてきたところから、地域建築の造形性というものが、京都の場合には、すべて伝統的な木造建築であって、ほかの現代建築は京都の地域建築ではない、というような印象を読者に与えたままであるとすれば、それは筆者のこの稿を進めるうえでの性急さと未熟であって、実はわたしは「地域建築」とは、もちろん、現代から将来にかかわるものですから「現代建築のすべて」についてそうであってほしい、といえるものでなくては意味がないと思っている。

保存建築に賛成しているのではないのですから。

紙面がつきたので先を急ぐが、もう1つ、これからの地域建築に関与する伝統技術を担うひとびとにとって問題点が残る。それは、技術的対応の問題である。

結論を急ぐが、「形は機能に従う」という支配的な言葉があつて、それに反旗をひるがえしているとすれば、新たに、地域建築に賛成する立場から「形は遺法に従いつつ、機能を配慮する」と言い換えて、これから考えてみたいと思う。つまり、「現代地域建築」に利口に対応しましょう、という提案を供することにとどめたいと思うのである。

これで地域建築論に賛成して、やや心理的偏重と強引な肩入れのお話を終えることにする。

(志野陶石社長)